慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『史記』滑稽列伝における人物描写について
Sub Title	Character portrayal in the Kokkei-Retsuden section of "The book of history"
Author	星野, 春夫(Hoshino, Haruo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.41, (1980. 12) ,p.66- 87
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00410001-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『史記』滑稽列伝における人物描写について

星野春夫

㈠ 滑稽列伝の成立について
㈡ 司馬遷における人物描写について
㈢ 褚少孫における人物描写について
㈣ 結語

（一） 滑稽列伝の成立について

司馬遷によって完成された『史記』百三十巻は、中国歴代の正史の範とされる史書である。自己の見聞を活かしつつ、構想の雄大さと叙述の公正さを失わないすぐれた文章は、後世の追随を許さないものがある。また、今は已に亡佚してしまった古代の記録や文書が保存されているということも、『史記』の価値を高める要因として見逃すことはできない。

しかし、古代の著述のもつ宿命として、『史記』自体にも欠落部分は生じている。

すなわち、『漢書』巻六十二、司馬遷伝に、「其れ十篇闕く。録ありて書なし」[1]、十篇の欠落部分は未だ成っていなかったのであり、目録のみが載せられていたのだ、とあることからも、それは窺われる。また、その欠落部分が具体的にどこかという問題については、三国時代の魏の張偃が『漢書』巻六十二の注の中で、司馬遷の没後に、景帝紀・武紀・礼書・楽書・兵書・漢興以来将相年表・日者列伝・三王世家・亀策列伝及び傅靳列伝が散逸したが、いずれも褚少孫という人が補った、という説をかかげている。

確かに、武紀、すなわち巻十二・孝武本紀[2]の内容は、巻二十八・封禅書の記事に非常に近く、後世の補続とは認められるのであるが、それとても褚少孫が書き綴ったという確証はない。だが、そんな中で、上記の三王世家・日者列伝及び亀策列伝に関しては、「太史公曰く」という論賛とともに、「褚先生曰く」というものが付されているので、全文か否かは別にしても、褚少孫によって補続がほどこされたことは事実と考えてさしつかえあるまい。

ところで、亡佚部分ではないのだが、史記の中には、褚少孫が特に司馬遷の記事の後に付けたすという体裁で、補選した記載がいくつか存在する。巻四十八・陳涉世家、巻四十九・外戚世家、巻五十八・梁孝世家、巻百・四田叔列伝及び巻百二十六・滑稽列伝の計五篇がそれであるが、三王世家の論賛に、「好んで太史公の列伝を覧観す」とあるところから察しても、列伝の二つの付記に対しては、かなりの自信を有していたのであろうことが窺われる。中でも滑稽列伝は、彼が筆力のあらんかぎりを尽して完成させた「傑作」であったと思われる。その実、同列伝の論賛にいおて彼は、他のどの個所にも見られない昂然とした調子で、

「臣幸に経術を以て郎と為るを得て、好んで外家の伝語を読む。窃かに遜譲せず、復た故事滑稽の語文章を作り、之を左に編す。以て覧観し、意を揚げ、以て後世に示し、好事者の之を読み、以て心を游せ、耳を駭かすべし。以て上方

太史公の三章に附益す」

と表明しており、この一文からも彼がどれほど滑稽列伝に心酔していたかが分かる。

では、これほど褚少孫が自信を漲らせている同列伝に対して、本家たる司馬遷はいかなる意義をもたせようとしているのであろうか。この小論の主題も、彼ら二人が描いた人物像を捉えながら、それぞれの滑稽観、ひいては歴史観の相違点を比較検討することにある。

ちなみに、「滑稽」という語の字義についてであるが、『史記』の索隠を書いた司馬貞は、次の三つの解釈をかかげている。

(イ)崔浩の説

「滑稽は酒を注ぐ器である。横たえて注げば、酒を吐いて終日もやむことがない。口を出た言葉が文章をなし、滑稽が酒を吐きつづけるように、言葉が窮まり尽きることがない」

(ロ)姚察の説

「滑稽は俳諧に等しい。言葉はのびやかで滑利、その知計は疾く出る。故に滑稽という」

(ハ)司馬貞自身の説

「滑は乱、稽は同である。弁口の敏捷な人は、非を是であるかのように説き、是を非であるかのように説いて、言説によって異同を混乱させることができるのをいう」

ここでは一応、司馬貞の説に従って考えてゆくことにする。

（二）司馬遷における人物描写について

そもそも『史記』は、ただ単に歴朝の政治的変動を列挙したような従来の史書とは大きく異なる。つまり、司馬遷は種々の人物を通して歴史の中に真の人間の姿を発見しようとしたのである。それゆえ、『史記』には、五帝本紀ならびに孔子世家といった、いわば「大いなる歴史事実」にまじって、別段世界の中心とは関連のない事項まで収められているのである。その最たるものが七十篇にもわたる列伝であることは言を待たない。しかも、そこに描かれる人間たちは、だれひとりとして象徴的な顔をもたないものはいないのである。ここで取り上げようとしている滑稽列伝についても、その一連のものとして捉える必要がある。すなわち、同列伝の冒頭において、

「孔子は、六経はその文が異なっていても、民を善導し、政治に貢献するという点においては一つである云々と言ったが、天道は広々として大きいのだから、六経ばかりでなく、談笑の言辞の端々にあらわれる少しばかり道理にかなったことが、大きな揉めごとをも容易に解決してしまうことがありうるのである」〔天道恢恢、豈不大哉。談言微中亦司以解紛〕としるし、論賛の中でも、

「こういった連中のなんと偉大であったことか」〔豈不亦偉哉〕

と結ぶあたり、高雅で簡潔な筆致の行間に、司馬遷の大胆なまでに落ち着きはらった批判の精神の発露を見てとる思いがするのである。

さて、話は具体的になるが司馬遷が記載した三章は、俳諧家の祖たる斉の淳于髡を始めとして、楚の優孟ならびに秦の優旃に関する記事である。そして当然のことではあるが、彼らは『史記』の、特に列伝における記述上の方法論にマ

ッチした人物である。もちろん、司馬遷は太史公自序の中で、

「余の所謂故事を述べ、その世伝を整斉するは、所謂作ることにあらざるなり」

と力説するように、司馬遷も孔子の方法を踏襲して、史実を曲げない客観的な歴史記述の立場を取ったのであるが、列伝においてその手法上意図的に象徴的な顔をもった人間を選び出した事実は否めない。そして、滑稽列伝の中の三人も象徴的な顔をもっているのであるが、そこには明らかに共通点が認められる。

それを列挙すると、次の五項目にまとめることができる。

㈠天性（肉体・天職）上、特異な要素をもっている

㈡立身出世には無縁である

㈢思想に中心とするものがない

㈣道理にかなった諫言を行なう

㈤その言動が人主（皇帝）の寛容さ・度量の大きさをクローズアップさせる

先ず、㈠についてであるが、これは彼らの記事を見れば一目瞭然である。すなわち、淳于髡は身長が七尺（当時の一尺は約二十二センチメートル）にも満たないうえに、当時にあって人の疣贅のように余剰の物と見なされていた女婿であり、優孟はその名が示すように生まれながらの倡優（楽人）であり、優旃もまた侏儒の倡優であった。彼らは生来社会的に大きなハンディを背負っていたばかりか、人を笑わせ、人に笑われるべき宿命をも課せられていたのである。

次は、㈡の「立身出世に無縁である」ことと、㈢の「思想に中心となるところがない」という点についてであるが、第一に淳于髡[3]を例にとって考えてみよう。先ず、彼が仕官ということに対してまったく興味を示さなかったことは、次

の記載からも理解できる。

「ある客が髡を梁の恵王に紹介した。王は左右の者を遠ざけて独りで二度対座したが、髡はついに一言も話そうとしなかった。王はいぶかしげに客を責めて言った。『あなたは淳于先生を誉めて、管仲・晏嬰もおよばない人物だと言った。しかし、寡人に会ってはくれたものの、寡人になんの得るところもなかった。先生は、寡人を意見を言うに足りないものだと思ったのだろうか。なぜだろうか』と。客がそれを髡に話すと、彼はこう言った。『当然です。わたしが最初に王にお目にかかったときには、王の御心は馬に乗って馳けまわることにありました。次にお会いしたときには、王の御心が音楽にありました。ですから、わたしは黙っていたのです』と。客はさっそく王に報告したが、王は髡をまことの聖人だと称揚し、心が駿馬と歌手に向けられていたことの非を認めた。その後、髡は王に謁見したが、ひとたび語ると、三日三晩続けて語っても倦まなかった。王は彼に大臣宰相の位を与えようとしたが、彼は辞して去った。そこで、王は彼に馬車・絹の巻物・黄金百鎰を贈った。淳于髡は生涯、仕官しなかった」

これは、『史記』巻七十四・孟子荀卿列伝にある逸話であるが、彼が読心術にたけていたこと、現実の物資に対する欲望はあったものの、世間的な地位や名声にはまったく興味を示さなかったことを如実に示しているものとして注目される。

また、思想に中心とするところがなかったという点についてであるが、『史記』巻六十二、管晏列伝に、彼が『晏子春秋』を読んで、斉の晏子の為人を忻慕するようになったということが記されており、巻四十七・孔子世家にいおては、晏子が儒者を滑稽で手本にはできないやからだと決めつけている人物であることから考えても、淳于髡が思想的に異端に属することは明らかである。その実、司馬遷も彼のことを評して、「博聞彊記なるも、学に主とする所なし」

（孟子荀卿列伝）と決めつけているところである。

以上、淳于髡が立身出世に無関心であったこと、思想に中心がなかったことについて、例証をここみたが、優孟や優旃についても同様のことがいえる。すでに記したように、両者ともに生まれながらの倡優であり、楽人としての職業的な大義名分を有していた以外は、当然確固たる思想や立身出世への夢をもっていたとは考えられない。

ちなみに、優孟が無欲の人助けをして、楽人としての誉れを高めることになった話を、本文中から引いてみよう。

「楚にはかつて名宰相と謳われた孫叔敖がいたが、彼の没後は、その子もすっかり零落していた。その話をきいた優孟は、その子の窮状を見かね、一計を案じると、孫叔敖の衣冠を作り、その声色と動作を真似る練習を積み、荘王の宮廷でおこなわれている宴席へと趣いた。王は大いに驚き、孫叔敖が生きかえったのではないかと見紛うほどであった。王は優孟を宰相に任じようとしたが、彼は妻に相談しなければ即答できないと述べると、宮廷をあとにした。そして、三日後に彼は再び参上して、こう申し上げた。『妻が申しますには、〝楚の宰相の地位など進んでなるほどのものではありません。孫叔敖様が宰相でいらっしゃったとき、あれほど忠誠を尽して国をお治めになり、楚の王さまは覇をとなえることがおできになりましたのに、孫様の亡くなられた後は、そのお子には錐を立てるほどの土地もなく、貧乏して薪を売りながら生計をたてている仕末です。どうしても孫様のようにおなりになるのでしたら、自殺したほうがまだましです〟とのことでした』と。このことによりやっと自分の非なるを悟った荘王は、優孟にあやまり、孫叔敖の子を寝丘の四百戸に封じた」

これは恐らく、優孟が楽人としての力量を最大限に駆使した宮廷内の滑稽戯なのであろうが、自分の生命を危険にさらしてまでも、亡き宰相の子を救ってやろうとした損得抜きの義侠心の表出については、充分注目すべき点ということ

ができよう。

さて、次は㈣の「道理にかなった諫言を行なう」という点についてであるが、ここで言うところの諫言とは、それとなく遠まわしに諭す諫め方、「諷諫」を指すといってよい。

そもそも諫言とは、主君に過ちがあった場合に、家臣が正面きって、あるいはそれとなく戒めることをいった。これが臣下に帰属する役割とされるようになった由来は相当古く、『論語』微子篇の中に、

「微子は之れを去り、箕子は之れが奴と為り、比干は諫めて死す」

とあり、憲問篇にも、

「子路、君に事うることを問う。子曰く、『欺くことなきなり。しかもこれを犯す』と」

という文章があるように、その属性は中国に初めて王朝が成立した時点に溯ることができるものと考えられる。時代が下っても、諫言を重視する考え方自体には変化がない。ところが、右の記載における諫言が主君を正面から諫めるものだという認識に立っているのに対して、後世では、諫言の種類も大きく増えることになる。例えば、前漢の劉向の撰になる『説苑』では、「正諫」（正面から諫める）・「降諫」（一旦君の言う通りに従い、徐々に諫める）・「忠諫」（誠心誠意諫める）・「懿諫」（飾らずに朴訥に諫める）・「諷諫」（それとなく遠まわしに諫める）という六種類に大別されている。たぶんこの事実は、諫言の主眼点がどうすれば主君に意見を取り上げてもらえるかということに移ってゆくことを裏づけるものであるといえよう。

さて、話は本伝の三人のことにもどるが、彼らが行なった諷諫にかかわる個所としては、おおむね次のような内容をもった話があげられる。

(イ)連日連夜酒宴をひらいては政事を顧みようとしない斉の威王を、淳于髡が「王宮の庭にとまる大きな鳥」の謎かけで諫め、王を発奮させ、国の危亡を救った話

(ロ)楚の荘王の愛馬が死んだとき、王は大夫の礼式によって葬ろうとしたが、優孟が王の愛馬なのだから当然人君の礼式をもって手厚く葬るべきだと暗に皮肉った結果、王も自分の非を認めた話

(ハ)秦の始皇帝が苑囿を拡張しようとしたとき、敵が攻めて来ても禽獣がいれば安心でしょうといって優旃が諫めたので、帝がそれを取りやめにした話

このように彼らは三者三様の諷諫をおこなっているものの、みな皇帝の怒りに触れるどころか、かえってさらに強い信任をたまうことになるのであるが、これはとりもなおさず彼らの話が理にかなっており、巧みな話術が人主の心をなごませる働きをしたからである。だからこそ司馬遷も彼らのことを、「豈に亦偉ならざらんや」と称賛することで、同列伝を結んでいるのである。すでに、滑稽の字義については前述したが、その中の一つ、司馬貞の意見によれば、「言説によって異同を混乱させること」がその特徴とされていたのに対し、右にあげた三者の言辞の非ならざることから考えてみると、どうも当てはまらないようである。

最後は、この諫言と非常に関連が深い(五)の「言動が人主の寛容さ度量の大きさをクローズアップさせる」点についてであるが、その裏を返えせば、司馬遷が武帝に対して批判の矛先を向けていることを示す点として注目されるものである。今まであげてきた幾つかの逸話からもわかるように、司馬遷はこの列伝の中に特異なキャラクターをもった三人の人間を描き、彼らをして頓智の才華を縦横無尽に発揮させるわけであるが、『史記』全般を通しての彼の観察者としての立場も、このようにいろとりどりの人間の生態を幅広く見据えようとする自由なところ（これこそ歴史家として必ず

貫かなくてはいけない著述態度ではあるが）にあり、決して儒教的な側面からのみ物ごとを考えようとする態度はとっていない。だが当然の結果として、この自由な見方は、彼をして現体制の意向から自立させ、時の権力者（武帝その人）の行為に批判を下さざるを得ない状況を作りあげることになった。それは、『文献通考』巻百九十一・経籍でも、李方叔の『師友読書記』の記事を引き、

「司馬遷、史記を作る。大抵は漢武帝の短なるところを譏る。……秦始皇本紀は、皆、武帝を譏るなり」

と断定しているところである。しかしながら、いくら司馬遷とても、現代に属する批判にどれほど危険が伴うかぐらいのことは充分に承知していた。『史記』全体を通じてみても、過去を論じるときには非常に活々と動く筆が、ひとたび世界の最高権力者たる武帝に話題が及ぶと、もってまわった表現が多くなってしまうのは、やはり彼が常に「死」と直面していることをよく知っていたからである（もちろんそれは、自分の生命を惜んでからではなく、一大史書の完成をライフワークと考えたからであるが）。例えば、彼がこの大部を完成させるのに一役を担った人物、李陵に関しても、巻百九・李将軍列伝の終わりに付け足す（後人の竄入という説もあるが）という形をとっているにすぎないことからも、そのことは充分理解できよう。

そして、この滑稽列伝においても、淳于髡ら過去の人物に思いを託し、滑稽の雄たる東方朔を始め、同時代の人間たちの事跡を一行たりとも記していないのは、右の事実に帰因するからであろうと思われる。

ところが、その一見消極的とも思える手法[6]が、より強烈な批判に直結することもありうるのである。故事をありのままに綴り、古き時代の皇帝たちの寛容さ、スケールの大きさを示しつつ、しかも同時代の人間に関する事柄を一切載せないということこそ、武帝が臣下の意見を聴くことを快く思わなかった（況んや、倡優という人間の範疇にも属さない

と考えられている者の話など、たとえ道理に合っていても聞きいれるはずがなかった）ことへの遠まわしの批判と受けとることができるのではなかろうか。恐らく、彼はこの効果についても十二分に了解して筆をすすめたに相違ない。

ここで、このあたりの経過をもう少し分かりやすくするために、本来なら補記をほどこした褚少孫の項で説明すべきところではあるが、前述した東方朔の記事を例に引いて考えてみたいと思う。一体、『漢書』などの記載を見るまでもなく、司馬遷の生きた時代は武帝のそれとほぼ一致する。そして、東方朔も武帝に仕えた人物として知られるので、司馬遷とて万が一顔を合わせることはなかったとしても、うわさを耳にするぐらいのことは当然あったと想像される。それにもかかわらず、司馬遷は東方朔について一行たりとも触れていない。あるいは、書くに足りないほどの人物と見なしたのであろうか。この点に関する疑問が生まれるのは、文献上では、『史記』成立後久しくたった後漢に入ってからである。

すなわち、『昌言』を著わした仲長統の言として『史記』索隠に引かれる、

「遷、滑稽伝をつくるに、優旃の事を叙して、東方朔を称さざるは非なり。朔の行事、豈に直だ旃・孟の比ならんや」

という指摘がそれであるが、これとてたんなる問題提起としての価値しかもち得ないようである。しかしながら、この疑問に対して明確な理由づけを与えている者がいないわけではない。それは、仲長統より百年あまり前の学者、桓譚である。彼は、その著『新論』の難事篇の中で、

「馬遷の史記、其の太史公の語は乃ち東方朔の加うる所なり。譚以前、未だ此の論あらず」

と言い放っている。もしも、彼が言うように司馬遷が東方朔に補記を依頼していたとしたら、当然のことながら司馬遷

が東方朔を滑稽の徒とは見なしていなかったことになる。だが、彼が東方朔のことをひと言も自著中に引いていないのはおかしいではないか。

これはやはり、前述した如く東方朔の逸話に言及すること自体が武帝に対する面と向かった批判であることを、司馬遷もよく心得ていたからであると考えるのが一番妥当ではなかろうか。そもそも東方朔が淳于髡ら三人と大きく異なっているところと言えば、立身出世を夢みたこと、だれかれとなく正諫したこと、及び儒者としての誇りをもっていたことなどがあげられるが、これをとっても本伝の三章の枠に入らないことは明瞭である。

しかし、そういったこと以上に重要なのは、武帝を正面から痛烈に諫めた者がいまだかつて東方朔以外になかったこと、そして遂にはそれによって宮廷を追放されることになるという事実についてである。王逸註の『楚辞章句』に収録される所の『七諫』という七首の詩は、なによりも彼の失意と落胆の念の大きかったことを物語っているものとして見逃がせない。はじめ、武帝は東方朔の不遜な態度をかえって気にいり、側近に置くのであるが、彼が宮廷内部のことにまで口をはさむようになるにつれて、武帝にとっても煙たい存在に変じてゆくのであった。その経過を示すものとしては、『漢書』東方朔伝の中に、あまりにも有名な逸話がとられている。

ある時、武帝は初めておしのびで遠方へ狩猟に出かけたが、もどってくると、もう少し近くにゆったりと狩りを楽しむことのできる場所を捜すように命じた。それが司馬相如の『上林賦』で有名な、のちの上林苑である。左右の者のだれもが賛成するなかにあって、東方朔は進み出ると、耕作に最適で、湖には魚が多いこの地を民衆から搾取することは、国家の信用を失なうことになりかねないこと、それは大罪を犯すに等しいことであると武帝に直諫する。帝は彼の諫言が道理にかなったものであったので、彼を太中大夫給事中に任命した。だが、結局数年後には、おもわくどおりに

上林苑を完成させている。

また、ある時こんな事件も持ちあがった。武帝の皇后の陳氏の母親にあたる館陶公主が夫の死後まもなく董偃という美少年を近づけた。もとは宝石を売る行商人の息子であったが、公主は読み書きを始め六芸のすべてを学ばせ、長安の貴族たちともつきあわせるといった熱の入れようであった。こうなると、公主は董偃を武帝にどうしても引きあわせたく思うようになり、帝を屋敷に招待し、料理人のかっこうをさせた董偃を紹介する。このことがあってからというもの董偃は武帝からも寵愛を受けることになるわけであるが、とある日、帝は公主のために未央宮の宣室で酒宴を開き、そこへ董偃も招いてやろうという計画を立てた。しかしながら、この時も東方朔が帝を諫めている。すなわち、宣室は先帝の正処であるのに、あのような淫らな斬罪にもあたいする董偃などを招き入れるとは言語道断だというのであった。この直諫を聞いて、帝はその宴をとりやめにしたが、この時もやはり、後に場所を移して董偃をまじえての盛大な宴会を催しているのである。

東方朔の諫言を聞く武帝の腹の中が憤怒で煮えくりかえっていたであろうことは、想像するに難くない。こんなことがあってから、東方朔はついに庶人に格下げとなり、武帝から見離されてしまうのである。

これらの話から考えるに、結局いくら滑稽の雄とされる東方朔のことでも、ありのままを記すことは、武帝への露骨な批判につながるのを司馬遷は充分考慮したというのが偽らざるところではなかったろうか。同時に、惜しむらくはこのあたりが司馬遷の批判の限界であったとも思われるのである。

さて、以上説明が冗長になってしまったが、司馬遷の記した三章について五つの共通点を中心に分析を行なってきた。そして、ある程度は彼がこの中で意図したものが明らかにされたのではないかと考える。武帝の治世は、董仲舒の

建言にもあるように、徳治教化の必要性と異端を排斥すべきだという論が圧倒的な支持を受けて叫ばれた時代である。老荘思想を始めとして、異端の最たる滑稽なる人間までも自著の中に持ち込んだ司馬遷にとっては、百三十篇のひとつひとつが均等の重さをもっていたと言っても過言であるまい。それゆえ、滑稽列伝だけをとっても、その根底に流れる批判精神を抜きにしては、その内容を把握し得たことにはならないのである。

ところで、ここでは批判の対象が眼前の武帝であったが、『史記』全般を通じても、彼は権力を掌握している人物に対しては、行動面と心理面の両側から容赦のない批評を行なっているのである。武帝ばかりでなく、その父である景帝の愚鈍な政治に対しても批判は及んでいる。前漢の劉歆の『西京雑記』巻六には、

「司馬遷の景帝本紀を作るや、その短を極言し、武帝の過ちに及ぶ。帝怒りてこれを削り去る」

という記述があり、漢王室の内情深くまでも司馬遷の監視の眼が向けられたことを伝えている。そしてここでも、彼の執拗なまでの批判精神が太史令としての義務感、自負心にささえられていたことを再認識できるのである。

(三) 褚少孫における人物描写について

褚少孫が補記・補続した部分のうち、列伝、ことに滑稽列伝に対してかなりの自信をもっていたことは前述した。

では、一体褚少孫とはいかなる人物だったのであろうか。だが、『史記』という大著に付記をほどこしたほどの人物にしては、現在残されている彼に関する記事はあまりに少なすぎる。わずかに、『漢書』巻八十三の王式の伝の中に、簡単な記載が認められる程度である。それに依れば、彼は前漢末の沛[7]の人であり、大儒王式[8]に師事し、元帝と成帝との治世の間に博士となり、魯詩に褚氏の学があったということである。しかし、ここで分かることと言えば、せいぜい彼

が儒者であったことと、詩の方面で業績を残していることといった程度である。また、班固が『史記』と褚少孫とのかかわりに関して、一言も触れていないのも奇妙である。

とはいうものの、『史記』中の論賛には、「臣幸に文学を以て侍郎と為るを得」（三王世家）という文章や、「臣幸に経術を以て郎と為るを得」（滑稽列伝）といった記載があり、学識の深さや学問に対する自負の念の強さは窺い知ることができる。

それでは、彼の不遜なまでの自信が滑稽列伝の補記にどのように活かせているかを考えながら、司馬遷の本伝との比較検討を行なってみたいと思う。

先ず、一度ざっと眼を通しただけでも気が付くのは、司馬遷が過去の人物に自分の意を託したのに対し、彼の方は圧倒的に同時代、特に武帝の時の人物を対象として取りあげていることである。すなわち、斉の淳于髡と魏の西門豹以外は、郭舍人・東方朔・東郭先生ならびに王先生ともに武帝の時の人である。

では、そこには何か深いわけでもあるのであろうか。実際、そこに描かれた人物が時代順に配置されず、思い出したように書き綴られている点から察しても、司馬遷が意図したようなものを見いだすことはできないようである。恐らくは、司馬遷を起点として、歴史を記録する慣習が広まり、前漢も末期になると、ある程度その当時の資料が手にはいりやすくなったということが、かなり大きなウェートを占めているのではないだろうか。例えば、東方朔の記事の中で、『答客難』という設難と、『拠地歌』という詩が大半を占めていることからも、それは理解できよう。魏の張偃については前述したが、彼の褚少孫に対する批評はさらに手厳しいものがある。滑稽列伝の補記に関しても、『漢書』巻六十二の注の中で、「言辞鄙陋にして、遷の本意にあらず」と言っているほどである。事実、褚少孫は司馬遷が記事にした淳

于髡についても補足を加えているのであるが、そこに見られる髡の姿は、司馬遷が抱いていたものとは少々趣きを異にしたものに変じているのである。

あるとき、斉王が淳于髡に命じて、鵠を楚に献上させようとしたが、髡は途中であやまって逃がしてしまった。彼はうまい言訳を考えつくと、空籠をさげて楚国へと赴き、王に拝謁してこう述べた。

「鵠に水を飲ませようとして、逃げられてしまいました。わたしは、すぐに自らの生命をたとうと思いましたが、吾が王が鳥獣のために士を自殺させたと非難されるのを恐れてやめました。それでは、鵠に似た鳥を買って代用しようかとも考えましたが、それは吾が王を欺くことになりますのでやめました。また、他国へ逃亡しようかと思いましたが、両国の君主の使いが通じなくなることに心痛み、やめました。それゆえ、ここに叩頭して罰を大王からお受けする次第でございます」

これに対して、楚王は立派な人物が斉王のもとにはいるものだと感心し、淳于髡に厚く褒美を与えてもてなしたという。

以上の逸話の内容からは、はっきりとしたテーマは汲みとることができない。ただ、淳于髡の狡猾さと楚王の愚かさだけが浮き彫りにされているだけである。

それでは、彼にとって滑稽という語のもっていた意味は、なんだったのであろうか。我々は、「褚少孫曰く」という論賛の内容と六章の付記から推測するほかに方法はないが、総じて滑稽な人物を話術が非常に巧みで奇策便計を即座に捻り出すことのできる、気転のきく人間といった曖昧な捉え方しかしていないようである。ちなみに、司馬遷が優旃の条で、「善く笑言を為すも、しかるに大道に合う」と言うのに対して、褚少孫は郭舍人のことを、「言を発し、辞を陳

べ、大道に合わずといえども、しかるに人主をして和悦せしむ」と評している。このことからも、褚少孫が滑稽という語に「諷諫」という属性を与えていないことが理解できる。乾隆年間の進士である王鳴盛も『十七史商榷』の中で、この点を評して、

「滑稽伝来、褚先生の附するところ甚だ多し。王夫人、其の子を斉に封ずるを請うことの若き、重ねて出づるは厭うべし。鄴令西門豹のこと、又まさに滑稽に附すべからず」

と指摘している。ここで言う西門豹の逸話というのは、かいつまんで言うと、鄴[9]の県令となった西門豹が、その地で行なわれている河伯の妻選びの風習によって町がすさび、役人と巫覡だけが私腹を肥やしているという事実をつきとめ、巫を黄河に沈め、役人たちをもこってり油をしぼって弊害を取り除き、名声を一躍高めることになるといった筋の話であるが、王鳴盛が言う如くここには滑稽の要素といったものはまったく見当たらない。それどころか、勧善懲悪の物語を読む思いに駆られるのである。

また、王夫人に関した話も非常につかみづらいうえに、焦点がぼけて、はっきりとしない。

すなわち、前半部分では、東郭先生という人物を登場させ、先生が帝の寵妃王夫人の親に金を与えるよう大将軍衛青に知恵をつけ、将軍がその通りにすると、帝も喜んで先生を郡の都尉に任じたということを記し、さらに東郭先生の奇人ぶりを強調するのであるが、後半は一転して、王夫人がその子を斉王にしてくれるよう武帝に懇願する場面に変じてしまう。褚少孫としては、東郭先生を滑稽の対象として記しているはずなのであるが、最後の王夫人の賢母ぶりの方が印象としては色濃く残ってしまうのは、やはり列伝の補記に確固とした主張がないからなのであろうか。

ところで、褚少孫の記事には、竄入ということ以外にもう一つ大きな問題点が残されている。それは、そこに彼の

「創作」が持ち込まれているのではないかという疑念である。それを論じるためには、どうしても東郭先生と同じく武帝の時代に生きた王先生の逸話をあげなくてはいけない。

武帝のとき、北海郡の太守を召して、行在所に出頭させようとした。ときに、文学卒史の王先生という人があり、太守と行動をともにしたいと願い出た。太守はしぶしぶ許したが、行在所に着くと、王先生は酒を飲むばかりで、太守と顔も合わせなかった。ところが、太守が武帝に拝謁する真際になって、王先生は太守に知恵をつけた。王先生は、こうたずねた。「天子が、もしあなたに、『どのようにして北海郡を治めて、盗賊をなくしたのか』とおたずねになりましたら、なんとお応えになりますか」。太守は、「『よい人材を選び出し、その才能に応じて官職につけ、すぐれた者を賞し、不肖なる者を罰したからでございます』とお応えしよう」と言った。すると王先生は、自分を誉めるようなことはよくないので、すべて陛下の神霊威武のおかげであると応えるように指図した。太守が武帝の御前に出ると、まさしくその質問があったが、太守は王先生に言われた通りの応え方をした。すると、武帝はそれを悟り、だれにその言葉を教えられたのかをたずねた。太守が王先生の名をあげると、果して後に詔があり、王先生は召されて水衡丞に、太守は水衡都尉に任ぜられた。

これがそのおおまかな内容であるが、右の文意から考える限りでは、先きの東郭先生の行動とそれほど変わらぬ話ということになってしまうのであるが、実はそう簡単にはいかないのである。なぜなら、『漢書』では、渤海の太守を宣帝が徴したと記述されており、宋の洪邁も、『容斎随筆』の中でこのことに触れ、この話のもとになっているのは、宣帝が渤海の太守龔遂を議に召したときのエピソードであり、王先生というのも曹王先という人物の誤謬であると言い、最後に褚少孫が間違えて書き加えたものであろうと結んでいる。

私も容斎が指摘するように、龔遂の話がその原型であるという点については異存がない。

しかし、右の文章を褚少孫がまったく誤解して書き綴ってしまったとは、どうしても考えにくいのである。第一に、北海太守に氏名が付記されていないのが不可思議である。第二に興味ぶかいのは、龔遂に対する彼の個人的な感情の影響がくっきり現われている点である。これに関しては、『漢書』巻八十八・儒林伝に詳しい記載がある。すなわち、

「王式、字翁思、東平新桃人也。事免中徐公及許生。式為昌邑王師。昭帝崩。昌邑王嗣立、以行淫乱廃。昌邑群臣皆下獄誅。唯中尉王吉、郎中令龔遂以数諫減死、論式繫獄当死。治事使者責問曰、師何以亡諫書。式対曰、臣以詩三百五篇朝夕授王。至於忠臣孝子之篇、未嘗不為王反復誦之也。至於危亡失道之君、未嘗不流涕為王陳之也。……後、東平唐長賓、沛褚少孫亦来事式、問経数篇」

というのがその部分であるが、傍点をほどこした個所からも分かるように、王式の弟子である褚少孫が龔遂を偽善者、あるいは不忠なる者と考えたとしても、無理からぬことではないだろうか。もしそうであったとしたならば、彼には龔遂の手柄話など、いかに興味ぶかいものであるにせよ、進んで書こうとしなかったであろうことは充分考えられる。

また、郭舎人の記事についても、武帝前後の逸話を集めた『西京雑記』や『太平広記』名賢諷諫の条に、東方朔の話としてとられているものとほぼ同じ内容を示しており、記事を増やして紙面をうるための褚少孫一流の「創作」と考えられないこともない。

以上、褚少孫の記事に限って、考察を試みてきたのであるが、その自信とは裏はらに、学者の趣味的な文章といったイメージを強く定着させる結果になってしまった。

もちろん、その内容を見ると、数多くの資料の中から六人の人間の記事を選び出した彼の事務処理能力については、

充分評価できるのであるが、惜しむらくは、そこに首尾一貫した主張（滑稽観）のなかったことが悔やまれる。極言させてもらえば、司馬遷の記述への補記・補続というよりもむしろ、紙面の余白体裁を繕ったという意義しかもたないということになるのであろうか。

ところで、彼が博士という肩書きをもちながら、列伝、なかんずく滑稽列伝に熱中したのは、一体なぜであろう。先ず考えられることは、経書の注釈よりは潑剌として自分の思いを投影することができたのではないかということである。そしてもう一つは、褚少孫が『史記』の補続という重責をまかされるほどの人物であったからには、彼がわざわざ同時代に属する人物を選び出して、遷と文才を競いあおうと考えたとしても、不思議はないということである。もちろん、これは推測の境を出るものではないが、万が一そうだったとしても、学者の手なぐさみと生命を賭した史官のライフワークとの差違がそのままの形で示されてしまうことは、また当然の帰結といえるのであろう。

（四）結語

司馬遷が『史記』全体に批判精神を行き渡らせていること、そして滑稽列伝についても例外でなかったことは、再三述べてきたところである。それは、裏をかえせば、彼が過去の事実の中に隠された種々の人間の生態を捉え、不遇の士から奇異な特徴をもった者に至るまで、一様に暖かい思いやりの気持で包みこんでいたことの証明になるであろう。だからこそ、本論に掲げた滑稽列伝の三人に対しても、「この連中のなんと偉大であったことか」という賛辞を惜しまなかったのである。そこにはもう、笑いの対象たる、倡優たちの姿はない。ものおじせず、堂々と人主を諫める彼らの態度に、正当な儒者のそれを見る思いがするのである。つまり「滑稽」とは、広義におけるユーモアであり、当然のこと

ながら説得力を備えたものなのであろう。

ところが、これが褚少孫の本伝への補記になると、司馬遷が浮き彫りにしようとした「滑稽」のイメージは崩れ去り、同時に毫末ほどの批判精神も汲みとれなくなってしまうのである。褚少孫にかかると、「滑稽」とは、多弁で詭計を弄するという意味のうえに、狡猾という要素まで付加された言葉に変じてしまう。それは、今まであげてきた逸話の内容からも、一目瞭然であろう。

一方では、司馬遷が強い使命感に燃えて、悟りきった者のように淡々と文章を綴ってゆくのに対して、褚少孫が論賛の中で示す自信に満ちあふれた不遜なまでの態度は、滑稽列伝に関する限り、その重心を揺るがすことになってしまったのである。『史記』滑稽列伝と一口に言っても、そこに厳然として一線を画すべき二種類の列伝が同居していたことは否めない事実なのである。

注

(1) 太史公自序には、百三十篇の各篇について、それを書いた理由とその内容の概略がすべてにわたって記されているので、欠落部分とされる十篇も当初は存在していたと思われる。

(2) 太史公自序には、今上本紀とある。

(3) 斉の都、稗下には多くの学者が集まって、宣王の庇護のもとに、学者町を形成した。彼らは「稷下の学士」と呼ばれたが、淳于稗もそのひとりであった。

(4) 『墨子』非儒篇にも同様の記載がある。

(5) 『孟子』には、淳于髡が孟軻をこきおろす場面がいくつかある。

(6) これは、『司馬遷之人格與風格』の中で李長之氏が高く評価するところの、「無言之諷刺」と「用借刀殺人的方法」との中間に位置する諷刺の手法といえる。

(7) シャヴァンヌは、現在の安徽省鳳陽だとしている。
(8) 字は翁思。『漢書』巻八十八に伝がある。
(9) 現在の河南省鄴縣。